

位置と環境

川内市の南部には、百次川、勝目川、木場谷川によって作られた南北に細長い隈之城平野が開けている。遺跡は標高12m程で、隈之城平野の中でも山間部よりの扇状地に立地している。周辺は水田として利用されているために、見た目は平坦な地形であるが、調査の結果、水田下に広がる古墳時代の地形は微高地と川跡が複雑に入り組んだ凹凸のある地形であることが分かった。

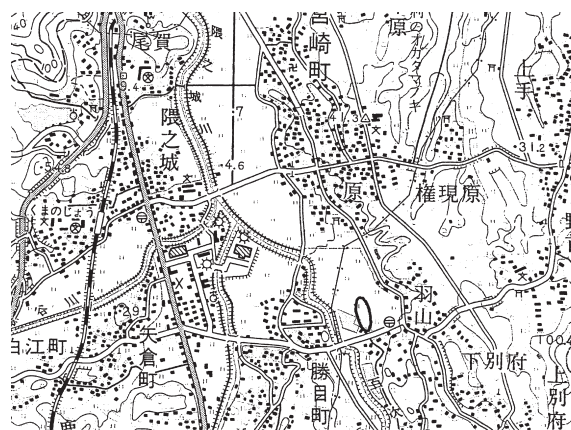
調査の経緯

遺跡の調査は九州新幹線鹿児島ルート建設に先立ち、平成11年（西暦1999年）に本調査を実施した。調査面積は1050㎡である。

遺構と遺物

遺跡では、縄文時代の遺物、古墳時代初頭の遺構・遺物が発見された。

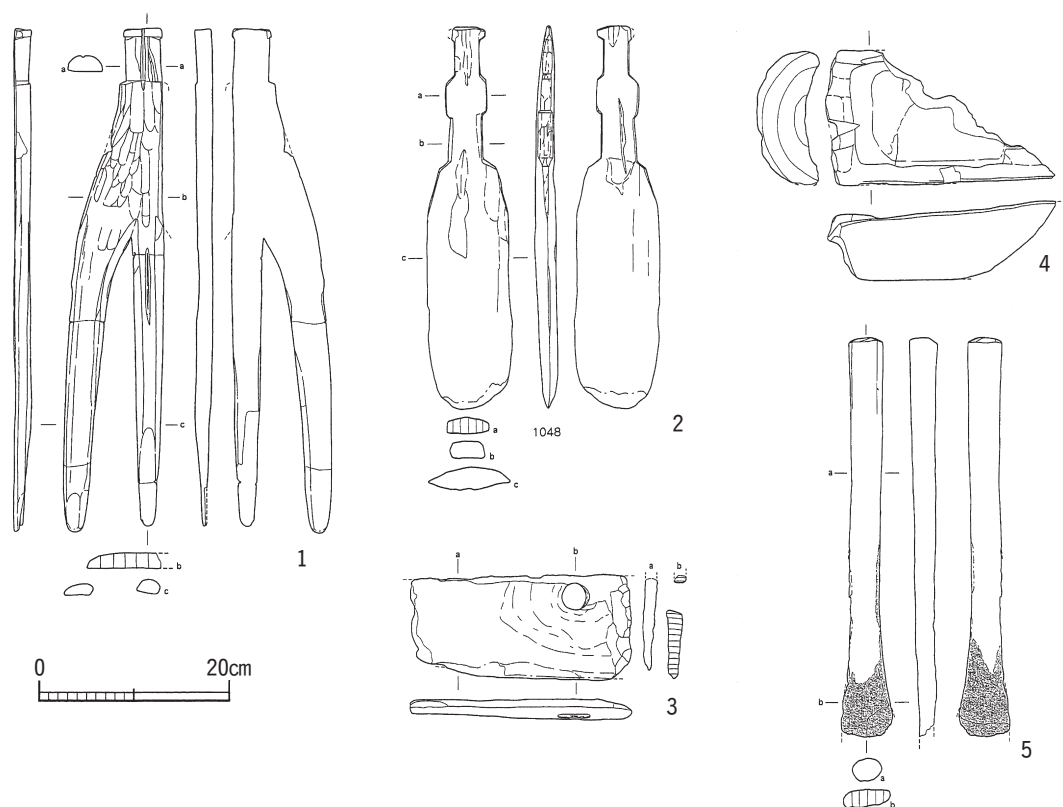
縄文時代の遺物は、縄文後期（約5000年前）の土



第1図 楠元遺跡の位置

器が発見された。これらの土器は、鹿児島県特有の土器である市来式土器や、熊本県でよく見られる西平式や北久根山式土器である。西平式土器や北久根山式土器の発見は、九州の西海岸沿いの地域間で交流があったことを示す証拠である。住居などの遺構の発見はなかったが、多くの土器とともに石斧なども見ついていることから周辺の台地上に集落がある可能性が考えられる。

古墳時代初頭の遺構は、竪穴住居跡2軒、炉跡2



第2図 木製品（1～3 鋏，4 容器，5 掘棒の柄）

基、土坑12基、柱穴2基、溝状遺構7条などが検出された。遺構と一緒に多くの土器が出土したが、注目される遺物は、約2000年前に作られた木製の鋤、掘り棒、丸木弓、容器などが腐らずに残っていたことである。

竪穴住居跡は、平野の中でも高く水はけが良い場所に作られ、住居に備えられた炉の中からは炭化米が見つかった。川が流れていた低い場所には、川が埋まった跡に水路を掘っている。この水路や、川跡の中から多くの木製の道具が発見された（写真1・2）。三又鋤、横鋤などの木製農具があることや、水路が掘られていること、炭化米が見つかったことから地形の低い場所を利用して稲作を行っていた可能性が考えられる。また、調査区の土を調べた結果、イネの葉に含まれるプラントオパールが多く発見され、稲作の存在を裏付けることができた。

特徴

これまでに、台地での遺跡の発掘調査が中心であった本県では、木製の道具の発見例が少なく、土器や石器を中心に研究が行われてきた。今後、楠元遺跡で見つかった木製の道具の研究によって、古代の

人々の生活について新たに多くのことが解明されることが期待される。また、古墳時代の人々がどのような場所で集落を作り稲作を行っていたのかを明らかにすることができた。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2003「楠元・城下遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書Ⅵ』57

(川口雅之)



写真1 水路の中で見つかった土器・木製品



写真2 川路で見つかった三又鋤